

川崎市長賞受賞作品

『「自然を守る」というバトン』

栗木台小学校 6年 福室 早織

「うわあ、何だあれ。おもしろそう。」

急に風景が町から森に変わったので私は足を止めてしまいました。その時私は五才位で、おじいちゃんと散歩をしていました。気になったからには行くしかありません。気分はもう探検家です。おじいちゃんと手をつないでどきどきしながら、長く急な坂道をのぼって奥へと進みました。

長く急な坂道をのぼり終えると、目の前はまるで別世界。たどり着いたのは黒川青少年野外活動センター。

「ちょっと森で探検してくる。」

と言って引きこまれるようにかけ出しました。少しだけ遊んですぐ帰るつもりだったのに、どんどん楽しくなって気が付いたら泥んこになるまで遊んでいました。

遊んでいる最中に、不思議な光景を目にしました。おじさんがせっかく立派に育った大木を切っているのです！

「なぜこんなに立派な木を切ってしまうのだろう？」

と不思議に思いました。でも

「おじさんは木を切る悪者にちがいない。」

と思い、怖くて理由は聞けませんでした。

それから六年。総合の学習で黒川青少年野外活動センターについて学ぶことになりました。私は幼かった頃をなつかしく思い出し、とてもうれしく思いました。当日、見学にセンターに行くとセンターの野口さんが木を切る事について話してくれました。

「大木があると大木の下には日光が入ってこず、下にある種が育たず新しい木が生えてきません。そうすると、やがて自然は無くなってしまいます。だからセンターでは毎月木を切っています。切った木はまきなどにしてセンターのキャンプで再利用しています。木を切るのは自然を守るためなのです。」

と教えてくれました。五才の時に見たおじさんは木を切る悪者ではなく、自然を守ってくれる良い人だったのだと分かりました。あの時森の中で夢中で遊べたのは、おじさんが木を切って自然を守ってくれているおかげだったのだな、と思うと、お礼を言いたくなりました。

木を切ってくれていたおじさんはセンターの木を昔からずっと切り続けているそうです。高いはしごに乗ってバサバサと木を切る姿はとても格好良く見えました。その時に私は

「自然のバトンを受けついでみたいな。」

と思いました。

最近、森や山、里山などが減ってきています。科学が発展していく中で、自然を何十年何百年守り続けるのはとても難しいけれど、今ある自然を守り未来につなげていく事が大切だと思います。私が望む未来の川崎は、自然といつまでもふれあえて、皆で楽しく里山で遊べる川崎です。そのために私は自然を守るボランティア活動に参加したり、友達とこれからも積極的に自然とふれ合ったりしようと思いました。将来、自分の子供や孫の代まで自然を守るバトンを受けついでいくのが、私の「夢」です。